

# 白山修験道の衰退と鎌倉仏教の興隆

——白山美濃馬場を中心に——

小林 一 葵 南山宗教文化研究所

## THE DECLINE OF Mt. HAKU SHUGENDO AND THE RISE OF KAMAKURA BUDDHISM

—WITH SPECIAL REFERENCE TO THE MINO BAMBA OF Mt. HAKU—

Kazushige KOBAYASHI, *Nanzan Institute for Religion and Culture*

### はじめに

美濃国郡上郡は白山三馬場の一つ白山美濃馬場の膝元にあたり、白山の氏子であった。その膝元に鎌倉仏教の進出があり、新旧交替の経緯を知る一適例地とおもわれる。郡上郡八幡町以北には鎌倉仏教のうち浄土真宗のみ定着し、以南は浄土真宗と禅宗（臨済宗、曹洞宗）が入り交っている。

本小論では八幡町を境にし、中世に禅宗の進出はあったものの定着しなかったことに注目し、白山修験道と鎌倉仏教との新旧交替の経緯を白山美濃馬場を中心に考察しようとするものである。

—

白山はすでに奈良・平安時代にはその名を中央に知られていたことは種々の古典にでている。『万葉集』巻十四に

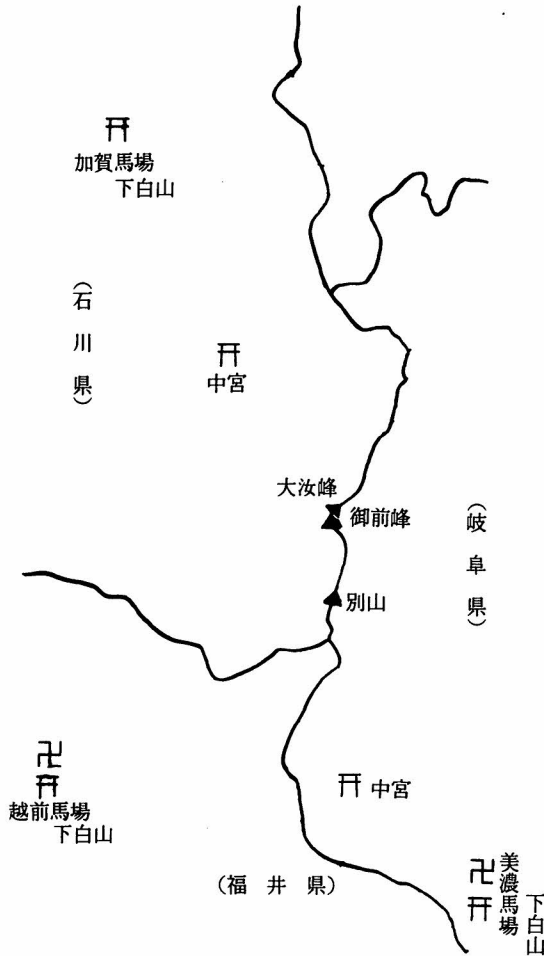
たくぶすま白山風に寝なへども子ろが襲<sup>おそ</sup>著<sup>き</sup>のあるこそ善<sup>よ</sup>しも  
とあるし、『古今和歌集』巻八には凡河内躬恒が「こしのくにへまかりける人によみてつかわしける」と題して

(白)  
よそにのみこひやわたらんしら山の雪みるべきもあらぬわが身は  
とか、同巻九にも「こしのくにへまかりける時、しら山をみてよめる」と題する歌などがある。天曆五年(951)の選出という『後撰和歌集』の時代になると、巻十九に読人しらずとして「白山へまうでける道中よりたよりの人につけて遣はしける」と題する

みやこまで音にふりくる白山はゆきつきがたきところなりけり  
という歌がある。この「読人」は僧か俗か定かでないが、明らかに白山参詣を目的としている。長寛元年(1163)成立という『白山之記』には

従<sub>2</sub>三方馬場<sub>1</sub>、参<sub>2</sub>詣御山<sub>1</sub>、道俗恒沙非<sub>レ</sub>喩とあるように、平安時代末期には「道俗」、僧も俗も白山参詣していることがわかる。この白山参詣には保安二年(1121)の奥書のある『白山上人縁起』(『本朝統文粹』巻十一所収)によれば「百日断<sub>2</sub>葷腥<sub>1</sub>」つ精神が必要であった。平清盛が仁安二年(1167)閏七月二十一日に「今日将始白山詣精進也」(『兵範記』)として始めた「白山詣精進」は従って百日間であっ

たろう<sup>#1</sup>。地獄を表出した修験道の山は早くから「道」はもちろんのこと「俗」(道者)の参詣を引きつけ、白山でも「道俗恒沙非喩」という程だった。「三方馬場」というのは天長九年(832)に開かれ、白山越前馬場、白山加賀馬場、白山美濃馬場の三馬場をいう。



初期の白山修験道はこの三馬場の中宮を中心にして、その勢力を進出させるが、この中宮は二カ所しかない。馬場というのは白山禅定道の登り口と考えてよく(もっとも後世飛騨からの登山口が加わるが、馬場とはいわない)、そこが下山七社の本宮(後に下白山)にあたる。すなわち本宮は三ヶ所(白山加賀馬場白山寺、白山越前馬場平泉寺、白山美濃馬場長滝寺)あるのに、中宮が二カ所しかないのは白山越前馬場と白山美濃馬場との中宮が同一であったからに他ならない。中宮というのは修験道の発生地をいい、二カ所の中宮というのは白山加賀馬場の<sup>すがさ</sup>箭筈中宮と白山美濃馬場、白山越前馬場共通の石徹白中居社である。下山七社は中宮三社の中宮、佐羅、別宮と本宮四社の本宮、金剣、岩本、三宮の総称で、この下山七社を組織化することにより白山修験道は発展し、その初期の勢力が中宮を中

心とするものだった。後述するように白山美濃馬場では地方的霊場、熊野信仰、牛頭天王信仰を吸収し、下山七社を成立させている。

初期の白山修験道は中宮が中心であったことは敦光朝臣の『白山上人縁起』で推定できよう。西因こと白山上人は諸山を苦修練行して、ついに白山加賀馬場中宮である筥笠神宮寺に四十三年もいた。ここに

定<sub>2</sub>置十二口之夏藤<sub>1</sub>。昼夜不断。奉<sub>レ</sub>念<sub>2</sub>弥陀宝号<sub>1</sub>

つたとあるのは筥笠神宮寺に常行三昧を修する十二人の夏藤を置いたことである。その「道場」を筥笠神宮寺といったとあるから、この西因こと白山上人によって白山加賀馬場の中宮が組織されたと考えられよう。中宮三社の別宮の成立が「大永神書」（『白山比咩神社文献集』所収）に「一条院御宇、永延二年戊子（1988）月日」とあるのも首肯できる。井上鋭夫先生は『鳥越村史』のなかで、この別宮に熊野権現が祀られていたといっておられ、それが中宮三社の別宮に組み入れられたことはすなわち白山修験道は熊野を吸収していったことを意味している。常行三昧を修する「夏藤」は『白山宮莊嚴講中記録』でいう堂僧に他ならなく、後述するが親鸞聖人も比叡山の堂僧であった。この中宮三社の勢力が『白山之記』にある白山五院、中宮八院を成立させるのであり、「本宮の勢力が北の鶴来扇状地にのびていたのに対し、中宮は西にのびて」（『井上鋭夫 1972』）おり、この西の方向に白山五院、中宮八院は成立している。『平家物語』の安元三年（1177）に起った加賀国目代藤原師経の狼藉に対して立ち上がったのが他ならぬ中宮三社と中宮八院の大衆であって、その勢二千余人であった。そして『白山之記』にあるように「国之八社」をはじめ能生（越後）、高峯（能登）等白山社は「三ヶ国（加賀、越中、能登）ニ充満」するようになる。その他、陸奥国平泉中尊寺の白山宮は文永九年（1272）で少なくとも別当が四代目であるし、白山構<sup>#2</sup>田の譲状に寛元四年（1245）のものがあるというから（「関東下知状」『鎌倉遺文』十四卷所収）、中尊寺白山宮成立はこの頃まで遡りえる。肥前国山田東郷の河上村は「比丘尼清浄等寄進状」（『鎌倉遺文』七卷所収）に

薬師如来利生之道場、白山権現擁護之霊地也

とあり、草創者円尋聖人の門弟尋有大徳は大治四年（1129）頃の人であるから、当山に白山権現が祀られたのは平安時代末期頃まで遡ることができよう。伊予国浮穴郡の菅生寺の鎮守神の白山大明神は少なくとも文永十年（1273）には祀られている（「一遍聖絵」）。越中国砺波の柿谷寺は弘長二年（1262）当時、泰澄大師建立の寺だとあるし（「関東下知状」『鎌倉遺文』十二卷所収）、若狭遠敷郡の谷田寺は真言宗の古刹で文永二年（1265）の「若狭国惣田数帳写」（『鎌倉遺文』十三卷所収）にその寺名が記され、弘安十一年（1288）の「谷田寺院主重厳言上状案」（『小浜市史』社寺文書編所収）に

天武天皇御宇白鳳年中、為泰澄大師建立

とある。

このように鎌倉時代初期には全国にその力を及ぼす布石はできていたが、白山加賀馬場の勢力はまだ「二ヶ国」内だけであったし、白山越前馬場はというと前出の「若狭国惣田数帳写」は若狭国のすべての寺社を記しているとおもえないが、それにしても神領を有している白山社は一社もない。ただ大飯郡に金剣宮が一社あり、この金剣宮が白山越前馬場本宮四社の金剣に比定されるとすれば注目される。おそらく若狭国へは白山越前馬場の勢力が進出したであろうから、その勢力は本宮の勢力でなければならない。というのは前述のように白山越前馬場の中宮は石徹白であり、その中宮の勢力は美濃国へ進出していったからである。つまり、白山越前馬場は中宮勢力が進出していったのではなく、本宮勢力が進出していったのである。白山越前馬場は白山馬場が開かれた天長九年直後に入唐五家の一人禅林寺宗叡が到っている。『三代実録』元慶八年（884）三月二十六日条に、この日は宗叡が亡くなった日であるが、宗叡の行状を記しており、

干レ時叡山主神仮<sub>2</sub>口於人<sub>1</sub>。告曰。汝之苦行。吾将<sub>2</sub>擁護<sub>1</sub>。遠行則双鳥相随。暗夜則行火相照。以比可<sub>レ</sub>為<sub>2</sub>徵驗<sub>1</sub>。厥後宗叡到<sub>2</sub>越前国白山<sub>10</sub>双鳥飛隨。在<sub>2</sub>於先後<sub>1</sub>。夜中有<sub>レ</sub>火。自然照<sub>レ</sub>路。見者奇<sub>レ</sub>之。(頭点小林)

とある。「到越前国白山」とあるのが白山越前馬場のこととおもわれる。また山岸共先生は元慶二年(878)には賢一が白山へ入ったといっておられるように(山岸共1977), 早くから「道」の禪定があったが, 若狭国の例でわかるように「充満」するようになるのは文永二年以降, 鎌倉時代中期以降であったとおもわれる。白山越前馬場の勢力進出が加賀馬場に比して遅いのは中宮勢力でなく, 本宮勢力であったからに他ならない。白山美濃馬場の勢力は建保三年(1215)成立の『舎衛寺縁起』(岐阜市舎衛寺所蔵文書)に

爰聖武皇帝曆神龜<sub>2</sub>年<sub>1</sub> 乙<sub>2</sub> 六月十八日, 雷電響雲承風動山、影向白山権現干比所

とあるように, 少なくとも建保三年にはその布石が考えられるが, 地方の氏神, 熊野信仰, 牛頭天王信仰を吸収していくのは, 中宮の勢力は鎌倉時代中期頃からだと考えられ, 本宮のそれは『白山之記』に長滝寺の寺名があるから長寛元年にはすでに成立していたのであるが, 南北朝時代頃だと考えられる。白山加賀馬場も中宮勢力に代って本宮勢力が擡頭してくるのはこの頃であって, 白山三馬場の白山信仰が全国に及んだのは南北朝時代と推定される。『太平記』巻第十七で活躍しているのは

豊原・平泉寺, 并ニ劍・白山ノ衆徒等, 二万余騎

と白山越前馬場, 白山加賀馬場の本宮勢力である。日本古典文学大系『太平記』では「劍」を福井県丹生郡織田町織田の劍神社としているが, 本文から見てもこれは白山加賀馬場の本宮四社の金劍であって, 石川県石川郡鶴来町の金劍宮である。「白山」はいうまでもなく本宮四社の本宮, つまり下白山である。

白山美濃馬場の中宮, 本宮勢力の推移についてももう少し詳しく述べる。美濃国郡上郡<sup>すいげら</sup>杉原(美並村)の熊野社は縁起<sup>113</sup>によると, 応和元年(961)に熊野比丘尼俊応が弥勒石(一名ヒトナリ石ともいい, 年々成長しているという。)をたずさえて来て祀ったのがはじまりといい, その背後の郡上郡と武儀郡をまたぐ高賀山は熊野三山が勧請され, 平安時代末期には熊野信仰が及んだ地方的霊場である。その杉原熊野社, 高賀山を白山傘下ににしたのが中宮勢力であった。この中宮勢力は虚空蔵信仰が顕著であって, その虚空蔵を杉原熊野社, 高賀山の本地仏とすることにより中宮三社の別宮として成立させた。杉原熊野社所蔵の天明八年(1788)の「濃州郡上郡杉原村海水山観音寺用文巻置」(関市池尻の弥勒寺堯澄が記した。弥勒寺は円空中興の寺で, 同じく杉原熊野社も中興し, 別当寺を海水山観音寺としたとおもわれる)によると, 本尊は熊野支配当時は熊野三所本地仏である阿弥陀如来, 千手観音, 薬師如来であったが, 白山の勢力が及んでからは阿弥陀如来, 十一面観音, 虚空蔵菩薩と熊野十二所になったとある。その時期は高賀山における虚空蔵菩薩をみれば見当がつく。武儀郡高賀(洞戸村)の高賀社(高賀山六社の一社)所蔵の大船若経二百七十五巻に

南無高賀三所権現虚空蔵菩薩

弘安元年(1278)七月

とあり, 懸仏では嘉禎三年(1237)銘のものが古い。郡上郡那比(八幡町)の新宮(高賀山六社の一社)の懸仏のうち虚空蔵菩薩の御正体で最も古いものは

奉<sub>2</sub>鑄頭<sub>1</sub> 高賀山権現御正躰虚空蔵菩薩 形像一躰金銅鏡面

正嘉元年<sub>2</sub>己<sub>1</sub>(1257)十二月十四日

大勸進聖人慶西

とあるものである。これらのことから白山美濃馬場中宮勢力の進出は鎌倉時代中期頃からであったとおもう。そして本宮の勢力は本宮四社の一つ岩本を牛頭天王社であった武儀郡州原(現美濃市)に成

立させるのが南北朝時代直前の元応年中（元年は1319）と考えられ、以後白山美濃馬場の勢力は本宮（下白山）である長滝寺を中心に発展していく。ために石徹白は白山加賀馬場中宮同様、禅定道の一中継地となり、衰えて早くから神道化が進み、戦国時代以前の一山組織が不明に帰してしまった。しかし、別当寺を導法院（徹宝院）と称していたらしいことはわかり、別当（本来は長吏）の変化したとおもわれる神頭職は残った。

この本宮の勢力は『太平記』にあるような白山越前馬場、白山加賀馬場の本宮程の勢力はなかったものの、鎌倉時代末期、南北朝時代には荘厳講衆が五十ないし六十余人もいたことでわかろうし、長滝寺門前の長滝（白鳥町）は妻帯山伏と巫女と神官の村であった。その勢力も室町時代末期の戦国時代には常の世における政治的宗教的動乱にまきこまれ、昔日のおもかげもなく退転してしまう。その背景には武力を有していたからに他ならないが、その前後の時代は白山三馬場のうち白山美濃馬場が一番勢力があった。白山越前馬場平泉寺が天正二年（1574）越前一向一揆により焼亡すると決定的になるが、白山美濃馬場独自で白山三山（大御前、越南知、別山）の梵字（牛玉宝印）を参詣道者の山帷子に捺し、本来白山越前馬場支配の大御前（白山三山の主峰）に美濃室を建立し、今別山社を建立する。これについて平泉寺との出入が大御前別当職出入というもので、寛保二年（1742）に起こっている。これは越前一向一揆により平泉寺が焼亡し、その地位を失っていたのであるが、その巻返しに他ならない。まず手始めに享保十七年（1732）に牛首風嵐両村（白峰村）と白山境界について出入を起こし、これに勝訴し、ついで石徹白、長滝寺を相手取って大御前別当職出入を起こしたのである。これも寛保三年に勝訴する。

白山三山の梵字というのは本来白山越前馬場の御前室（越前室）で平泉寺が「背々法印と申して、見宮延命長久之梵字」（「白山権現従先規建立之社堂之訳」『平泉寺文書』上巻所収）を捺していた。白山美濃馬場独自で白山三山の梵字を捺すようになると、大御前にある美濃室に大御前別当をおく。美濃室は『白山之記』には記されておらず、道興准後の『廻国雑記』に「三の室」とあり、従って道興准後の白山禅定した文明十八年（1486）には大御前に美濃室が建立されていたとおもわれ、室町時代末期成立といわれる丸岡町国神社所蔵の白山曼荼羅には描かれている。この頃から白山三馬場のうち白山美濃馬場の擡頭がみられ、大御前別当の初見は永正十八年（1521）である。この頃長滝寺で進退していた別山（白山三山の一峯）の美濃室（三之室ともある）を石徹白に譲渡し、自らは大御前に進出していったのである。そして譲渡された石徹白では別山にある美濃室を別山室と称するようになった。その譲渡した時期が越前一向一揆の勃発した永正年間であったことは注目されよう<sup>14</sup>。永禄十年（1567）の「石徹白藤十郎申状写」（石徹白徳郎家所蔵文書）に

彼三之御山(白山三山のこと)之儀者何も加笏(州)内にて御座候へ共、大御前ハ飛驒三木方別当にて進退被仕候、おなんちハ加賀那多寺より取行被申、別山者拙者昔より進退仕候

とある。本来白山加賀馬場で支配していた「おなんち」は『白山之記』にいう「三寺」の一寺那谷寺が支配し、白山越前馬場で支配していた大御前は当時飛驒国司三木方が進退していたことをいっているもので、大御前を三木方が進退しているというのは大御前の美濃室を三木氏家臣の都筑氏が支配していたことをいう。天文七年（1538）の「三木直頼等連署状写」（宝幢坊所蔵文書）に

白山大御前別当職之儀、辻坊就御沽却、都筑小右衛門尉令買徳候

とあるように、大御前別当職を長滝寺の辻坊が都筑氏に沽却した。だから永禄十年当時は「三木方別当」とあるのであり、大御前にある美濃室を三木方が進出していたのである。大御前別当職は前述のように永正十八年に長滝寺の良信がなっているのを初見とし（「白山大御前堂算用状」宝幢坊所蔵文書）、天文年間には辻坊がなっている。ついで三木方別当ということになるが、三木方別当は天文七年から天正十三年（1585）までの約五十年間だった。というのは同年に金森氏によって三木氏は滅ぼされるか

らで、天正十四年には長滝寺の三治坊権大僧都実典がその職に就いている。寛文十三年（延宝元年、1673）には大御前別当代として等覚坊栄玄がいるが、寛保二年の大御前別当代職出入で敗訴したために大御前の美濃室はなくなってしまった。

焼亡以前の平泉寺には「日本国一番の法師大名」（『朝倉始末記』）とさえ異名をとった波多野玉泉坊、飛鳥井宝光院がいたが、天正二年の焼亡以後は大御前には美濃室の他に白山越前馬場からの参詣道者のために牛首風嵐両村が六道室を建立し、二三十人も詰めていた程だった（小林一繁 1975）。白山加賀馬場本宮も文明十二年（1480）に焼亡して以来、その地に再建されず（『白山宮莊嚴講中記録』）、神道化したため、白山修験道としては那谷寺の方に移り、本来本宮で支配していた越南知は那谷寺が進退し、加賀室は尾添村（尾口村）で管理するようになるが、牛首風嵐両村と出入を起し、尾添村が敗れたため元禄三年（1690）には加賀室は無住だった。その間天正十六年（1588）には長滝寺で越南知社を造営している（『莊嚴講執事帳』第二巻。『三峯相承法則密記』（『修験道章疏』三所収）著者阿吸房則（即）伝はその奥書きに

干<sub>レ</sub>時大永五乙西仲秋<sup>人皇百五代  
後柏原院御宇</sup>上<sup>フコフヒ</sup>澁之頃日。以<sub>2</sub>北路廻脚之節<sub>1</sub>不<sub>レ</sub>意留<sub>2</sub>草鞋於加州那谷寺嵩窟<sub>10</sub>  
不<sub>レ</sub>凶掛<sub>2</sub>錫環於白山千手峯之樹林<sub>1</sub>。剩<sub>2</sub>応<sub>2</sub>当山住客望命<sub>1</sub>。点<sub>2</sub>一句之肖<sub>1</sub>。試修<sub>2</sub>行從因至果一峯<sub>1</sub>。  
出<sub>2</sub>生生儀軌<sub>1</sub>如<sub>レ</sub>形令<sub>2</sub>成就<sub>1</sub>。

といっている。しかも「望命」により白山加賀馬場の入峯さえ行なっているから、大永五年（1525）頃には白山加賀馬場の白山修験道の中心は本宮から那谷寺に移っていた。だからこそ「おなんちハ加賀那谷寺より取被申」れていたのである。白山加賀馬場の入峯を虫尾峯入峯といい、文明十六年（1484）、同十七年の入峯碑伝が伝わっている。

別山については「拙者昔より進退仕候」とあるが、別山室の支配は永正四年（注4参照）からであり、「拙者」というのは石徹白家神主のことである。従って別山は神主家の家督になっていたが、当時石徹白中居社（中宮）神主職の石徹白家は五代つづいていた。それ以前は三人の社家が（もともと十二人いたという）が年番で神主になっていたのを越前朝倉家より一人に定めよという指図があり（宝暦四年の「杉本左近等連署訴状」桜井家所蔵文書）、郡上郡粥川（美並村）から児河合を呼んで神主にした。この児河合が石徹白家神主の初代で、二代目が林阿弥、三代目が源阿弥、四代目が胤弘、五代目が胤弘の娘婿の次男石徹白彦右衛門長澄である。そして六代目に徳阿弥（三代目源阿弥の弟）の長男石徹白藤十郎に跡目をつがせたが、幼少であったため当座の間上村五郎左衛門を後身役とした。ところが藤十郎が成人しても上村五郎左衛門はその職を譲ろうとしなかった。ために元和五年（1619）に石徹白神主職出入という事件に発展するが、神主職は惣中一統評議の上で相定めることになっており、上村五郎左衛門がそのまま神主職についた。この上村家神主は以後六代つづくことになり、その六代目が上村豊前で、石徹白における最大の出入である宝暦の神道騒動を引き起こすことになる。この神道騒動は千葉乗隆先生がすでに指摘されておられるように、浄土真宗と白山修験道とがからんでいたのである（千葉乗隆 1971）。

## 二

以上のような白山修験道の発展と衰退をみるが、この室町時代末期の戦国時代は同時に白山美濃馬場における鎌倉仏教の進出期でもあった。郡上郡八幡町以北は新宗教、旧白山修験道寺院を除いて浄土真宗のみであり、以南は浄土真宗、禅宗（臨済宗、曹洞宗）が入り交っている（他の鎌倉仏教の浄土宗、日蓮宗は一か寺づつのみ）。もっとも石徹白上在所地区は江戸時代には檀家制度により禅宗であった。これは当地の浄土真宗に対するものであって、神道化したものの白山修験道をもちつたえたと

いえ、明治維新後に神道修正派になり、戦後中居社を奉ずる神社神道を組織した（白鳥町教育委員会 1977）。また大和村に臨済宗の木蛇寺（東家の菩提寺）があったが、永禄年間に東氏が滅びるとともに焼亡し再建されていないから、禅宗は八幡町以北では進出はあったものの庶民間に定着しなかったと考えてよいとおもう。これらの例外は従って除外してもよいだろう。まず鎌倉仏教のうち浄土真宗の進出についてみる。

越前穴場（和泉村）は三河の和田門徒が南北朝時代にその教線を敷いていたといわれ（千葉乗隆 1977）、早くから進出していたが、白山美濃馬場の郡上郡へはそれよりもかなり遅い進出であった。「白山信仰圏での本願寺教団の展開」（早島有毅 1974）で「奥美濃地方に本願寺が本格的に教線を伸長し、農民を存立基盤とするのは、白山信仰圏で例外がなく文明三年（1471）蓮如の吉崎進出を直接的契機とする」（頭点小林）とある。その結果白山美濃馬場は「白山本地中宮長滝寺伝記」（『濃北一覽』所収）にあるように

文明ノ頃ヨリ慶長の頃迄世上穏ならず乱世なり……其頃本願寺繁昌の折柄なれば長滝寺坊中飛州川上郡辺々は本願寺ニ転派いたし

た。『莊嚴講執事帳』（長滝寺所蔵文書）文禄四年（1595）条にも

寺門之衰微養老以来有之間敷事也

とある程だった。もちろんこの原因には長滝寺最大の寺領だった川上庄（『白鳥町史』によれば現在の長野県清見村と益田郡・大野郡・高山市の一部を含んだ地域という）が三木氏に押領され、はては金森氏の領地となり、乱世の世の参詣人も少なかったであろうが、「文明ノ頃ヨリ……乱世」であった戦国動乱の渦にまきこまれたことが原因している。そしてそれよりも重要な要因として長滝寺坊中が「本願寺ニ転派」したという点があげられる。

戦国動乱にまきこまれたということは武力を有していたことに他ならないが、石徹白中居社の神主であった石徹白彦右衛門長澄（石徹白家神主五代目）は、はじめ朝倉家に仕えていたが後に金森家の千五百石を有する家来となり、飛騨国司であった三木氏を天正十三年に滅ぼしていることは前述した。それより以前の元亀二年（1571）に織田信長が中居社に鰐口を寄進しているのは注目される。長澄はしかも浄土真宗照蓮寺門徒だった。このため長滝寺領だった「飛州川上郡辺々は本願寺ニ転派いたし」た直接的原因があるのであろうか。長滝寺も天文二年（1533）の「斎藤利茂長滝寺掟書」（長滝寺所蔵文書）に「諸軍不可執陣之事」とか「寺僧不可諸人被官」とかあり、寺僧が武力を有していた。ところが掟書にもかかわらず同九年八月廿五日に（『莊嚴講執事帳』天文十年条）

越前衆（朝倉軍）当郡へ乱入し、同日当寺に彼人数陣執、坊中悉縣荒、乱坊狼藉沙汰之限（割注小林）

をつくし、さらに永禄二年（1559）の一族同士の東氏と遠藤氏との争いで（『莊嚴講執事帳』永禄二年条）当郡就□乱八月ヨリ退転仕候、然者当寺悉ク社内等迄悉破、満山悉ク方々へ退散仕候とあるように、まきこまれてしまう。このため本文はつづけて長滝寺坊中の「竹本坊、経聞坊、学仏坊、窄人候分」とあり、「満山悉ク方々へ退散」し、これらの坊には「窄人」が入りこんだのである。「窄人」というのはおそらく遊行の山伏（従って客僧ともいう）のこととおもう。

長滝寺坊中が「本願寺ニ転派」した例としては長滝寺山内の三船の坊（現非願寺）が明応二年（1492）に安養寺門徒になっており（井上鋭夫 1972）、同八年に実如上人の裏書のある方便法身尊像を下附されている。

积実如（花押）

明応八年己未四月廿五日

大樽安養寺徒

美濃国郡上郡山田庄白山長滝寺内三船

## 願主釈西了

とあり、「歩岐嶋悲願寺之起原及び沿革」(『長滝寺真鏡正編』所収)に

文明五年(1473)前谷三船住人日置又左衛門ト云フモノ、越前吉崎在住本願寺蓮如ノ法弟トナリ、  
釈西了ト改メ、真筆ノ法号ヲ受ケ、旧里ニ帰り三船ニ於テ一字ヲ創立シ西林坊ト称ス、第四世了  
道天正年中歩岐嶋ニ移リ延宝五年(1674)二月廿五日非願寺ト改称セリ

とあるが、井上鋭夫先生は悲願寺の前身の西林坊は長滝寺山内の坊であったと推定しておられ(井上鋭夫1972)、白山修験日置又左衛門が安養寺門徒になったとおもわれる。安養寺はもと近江国にあり、寛正年中(元年は1460)に美濃国安八郡大樽村に移り、その後天文五年(1536)に白鳥町大島に移った。次に道善坊が門徒になった例をあげる。「二日町西円寺創業之事」(『長滝寺真鏡正編』所収)に

大永三年(1523)長滝三嶋三郎左衛門、本願寺第九世実如ノ法説ニ感ジ、法号ヲ受ケテ道善坊ト称シ、二日町ニ帰り草庵ヲ結び、天文元年道場トシ、正徳二辰(1712)一字ヲ建立シ西円寺ト称ス

とあり、西円寺前身の道善坊も西林坊同様に長滝寺坊中であったとおもわれ、それを道場としたようである。

白山修験道の一発生地(中宮)の石徹白も同時に浄土真宗の進出があった。照蓮寺(現高山別院)第十世の明心は「泰澄大師の再来」(『岷江記』)といわれ、白山禅定したり、諸奇蹟をおこしたり、石徹白に威徳寺を草創した。明心は『岷江記』によると実如上人の後身をへて飛驒へ文亀元年(1501)十五歳で帰り、享禄四年(1531)に亡くなったという。威徳寺所蔵の実如上人裏書の方便法身尊像に

大谷本願寺釈実如(花押)

飛州白河照蓮寺門徒

越前国大野郡石堂代

願主釈道幸

とあり、『岷江記』でいう明心が飛驒に入る直前の明応五年(1496)に照蓮寺を手次として下附されている。この道幸というのは中居社の社僧の一人であって、威徳寺はもとは持泉坊といい、元和五年(1619)に寺号を許され威徳寺と称したというが、もとの持泉坊は中居社の別当坊の一つであったとおもう。明応五年頃になって白山修験道の一発生地の石徹白に浄土真宗の進出が可能となったわけであるが、明心が「泰澄大師の再来」と称されたことは重要で、白山山頂の地獄の阿鼻の釜沸を鎮め、女人禁制の大白川温泉に女人を入湯せしめる等の奇蹟をおこしたことから、かく称されるようになったのであるが、多分に明心は修験的である。もっとも当時の白山修験道はこのような奇蹟を行なえない程宗教的实践から遠ざかっていたともいえよう。石徹白長澄のようにいくら武力を有していてもこれを行なえない白山修験道には何んの味力もない。

中宮の石徹白、本宮の長滝寺でさえこのような状態であったから、飛驒川上庄、郡上郡では当然であった。河村定芳先生は何んの史料によられたか定かでないが『白山信仰と真宗の興隆』で、郡上郡中の「長禄年中(元年は1457)より明応六年(1497)までに出きた真宗寺院三十六箇寺の中、天台長滝寺末から改宗したもの二十四箇寺」もあったといっておられる。『安政四巳留記』(経聞坊所蔵文書)に

末寺之儀、往古は数十ヶ寺有之候得共、中古当山及衰微候節、追々転流仕候趣ニ御座候

とあり、諸所にあった長滝寺の数十ヶ寺の末寺は諸宗に「転流」し、安政四年(1857)には末寺は一ヶ寺しかなかった。その時期こそ「中古」すなわち戦国時代であった。

これら諸所の末寺の「転流」の一二をみても。郡上郡美並村は白山の氏子であるとともに高賀山の膝元にあたる。高賀山は前述のように鎌倉時代中期頃、中宮三社の別宮として白山下山七社に組み入れられたことは述べた。そして村内の氏神の多くを白山社とし、中でも重要な位置を占めている白



山社が梅原と荏安の両白山社である。梅原白山社の別当寺はその変化したとおもわれる薬師堂があるが、史料が少なく論を進めることはできない。荏安白山社別当寺は現存し、真福寺（真言宗であったが明治以後臨済宗となり、現在は公民館として使用）という。この真福寺の他に別当坊として寛文七年（1667）頃には玉蔵坊、正徳三年（1713）頃には秀忍坊の名が史料に散見される。そして現在浄土真宗大谷派の乗性寺の前身が別当坊の一つだった。乗性寺は寛永八年（1631）に寺号を許されたが、それ以前は西教坊と称していた。金森氏が郡上に入部した際に差出した元禄十年（1697）の当寺所蔵の「覚」によると、郡上領主遠藤六郎左衛門盛数の舎弟照山が永禄五年（1562）に草創したとある。ために当寺は遠藤家の菩提寺となる。この「覚」にはそれ以前のことは記していないが、「下荏安乗性寺由緒之事」（『濃北一覽』所収）に

下荏安村戸谷道場正嘉元年＝草庵とす。長滝寺配下＝而法相宗也。年を経て長滝寺衰微して東本願寺配下と転派いたしける

とあり、法相宗はともかくとしても正嘉元年（1257）に荏安白山社別当坊として成立し、「年を経て長滝寺衰微し」た戦国時代の永禄五年に浄土真宗の寺になったものとおもわれる。無住だった西教坊に遠藤盛数の舎弟照山が止住したと推定される。しかしこの照山は前出の「下荏安乗性寺由緒之事」には東家の家臣植生太郎左衛門高照とし、大和村の東家氏神の妙見（現明建）社神職としている。しかも当寺には「廻国九箇条掟書」を所蔵している。当寺は貞享四年（1687）頃まで照蓮寺末になっており、照蓮寺は後述するように遊行回国的聖とおもわれる嘉念坊善後の開創になる。異説のある照山は遊行回国的聖であったという史料はないが、遊行回国的聖であったからこそ異説も生じるのであろうか。さらに注目されるのは妙見信仰をもった東家が浄土真宗進出に力をかしたのではないかとおもわれる点である。当寺所蔵の『親鸞聖人御寿影由来記』（前欠文書のため仮称）に東胤行が親鸞聖人に帰依したいきさつを記しており、生身の如来（親鸞聖人）に仕えることは浅からず因縁によると氏神である妙見菩薩の夢告を蒙り、これにより貞永元年（1232）に北条時氏が鶴岡八幡宮へ一切経奉納した供養会の導師をつとめた親鸞聖人に帰依したという。また美並村には善俊のような遊行回国的聖の守本尊の阿弥陀如来像を本尊として祀る西本願寺派の専念寺がある。当時の開祖は専祐坊といい、当寺の縁起である「美濃国郡上郡荏安村専念寺本尊略記」には大和国平城京の西大寺の覚乘法師が伊勢太神宮御作の一尺三寸八分の阿弥陀如来像を笈に入れ、六十余州を結縁し、美濃国白山麓の長滝に草庵を結んだ。その阿弥陀如来を専祐坊が供奉し、当地に祀ったとある。この専祐坊は享禄六年（1528）に亡くなっているから、白山修験であったとおもわれる専祐坊が門徒になったのも戦国時代であって、覚乘法師はいつ頃の人か定かでないが、嘉念坊と同じような遊行回国的聖が白山修験道の中に入って来ていたことは後述しなければならないが注意される点である。

次に禅宗の進出についてであるが、上の保（郡上郡のどの範囲までを含めていうのか定かではないが『白鳥町史』によれば白鳥中津屋を流れている和田川以北という）が長禄二年（1458）から一時期京都妙心寺の寺領になったようであるし（妙心寺文書『岐阜県史』史料編古代中世四所収）、前述のように大和村栗栖に東家菩提寺の臨済宗木蛇寺があったが、永禄年間に焼失して以来再建されなかった。このことはその宗旨が定着していなかったとみるべきで、東氏が滅びるとともになくなった<sup>45</sup>。現在禅宗寺院は八幡町以北には一寺もなく、浄土真宗が白山修験道の一発生地である石徹白（このうち上在所のみ白山修験道を保持した）にまで定着できたのに比べると限界があった。

白山社別当寺が禅宗寺院に『安政四己留記』にいう「追々転流」した一二の例をあげる。美並村木尾の白山社別当寺は安永二年（1773）の『郡上領地留記』（大西家所蔵文書）木尾村条に

白山社老間四面板葺、鳥居高八尺、拝殿式間式尺、三間式尺萱葺、別当福春庵

とある。この福春庵は現存しないが、木尾白山社隣地の洞泉寺末寺であった。当庵は延宝五年（1677）

に開基の空谷寿芳座主が亡くなっているから、すくなくともこの頃には成立していた。本寺である洞泉寺は当寺所蔵の『靈龜山洞泉寺』によればもとは真言宗であったが、当地の豪士庭田長之進が天正十三年(1585)に京都妙心寺の大洞祖伝を請じて開山とし、以後臨濟宗妙心寺派の寺となったとある。真言宗から臨濟宗になった時、その本寺としたのが洲原白山社の別当坊であった曹溪寺(現廃寺)で、これらの点からみて、天正十三年から福春庵成立まで八十年程あるが、洞泉寺は真言宗時代当時、木尾白山社の別当寺であったと考えてよいだろう。前述の苺安白山社別当寺の真福寺も明治以前は真言宗であった。高賀山六社の一社である粥川(美並村)の星宮は縁起によれば天曆年中(元年は947)に藤原高光によって開闢された<sup>16</sup>。その別当寺が真言宗無本寺の粥川寺である。現在は無住で社務所を兼ねているが、星宮同様藤原高光の開創という。その別当寺の一坊だったとおもわれるのに、現在曹洞宗永平寺派の林広院がある。当院は苺安にあるが、寺伝によるともと粥川にあり、藤原高光の嫡子高森の末裔粥川上野介光林が創草し、その光林の子孫である広光が嘉吉元年(1441)に越中国の行脚僧梅庭に帰依し、領主遠藤家の帰依も得て、現在地の苺安に移り曹洞宗の寺としたという。『郡上領地留記』には

壱ヶ寺 林広院 禪宗越中国新川郡布見村  
大安寺末寺 拾間=七間壱尺

とあるが、おそらく曹洞宗以前は粥川寺同様真言宗であったろう。中宮三社の一社佐羅である武儀郡上河和(現美濃市)の別当寺であった靈泉寺は『新撰美濃志』によると

天正五年鰲山和尚の開基にて神応山と号し、曹洞宗、下有知村龍泰寺の末寺なり

とあり、曹洞宗以前は何宗であったか定かでないが、白山修験道の衰退期であった戦国時代の天正五年(1577)に曹洞宗に「転流」している。

本宮の長滝寺が天台宗であったのに対して、これらの寺がもとは真言宗であったのは注目される。長滝寺は応安元年(1366)に延暦寺末になっているが(「延暦寺政所下文」長滝寺所蔵文書)、その後寛文五年(1665)の宗旨御改(諸宗寺院法度)で東叡山末になる。しかし山内での真言宗の坊には阿名院、中之坊があった。その他の坊中は天台宗で、江戸時代のものであるが妻帯山状が天台宗になっている史料をあげておく。享保十二年(1727)の「左兵衛誓書」(経聞坊所蔵文書)に

私義当年は天台宗=被成、宗門帳=御入可被下ゆ(候)、然者当年中=山伏=羅成、何事=よらず坊役其外相応之公用随分相勤可申候、以上

蔵泉坊後家養子

左兵衛(印)

享保十二丁末年三月十日

御坊中様

とある。飛驒国については『善俊光正録』に

白川、小鳥、川上の三庄は白山長滝寺の会下にして、天台の宗風に帰せし

とあるように、本宮の勢力が及んだ地は天台宗で、それに対して中宮の勢力の及んだ地は真言宗であったかもしれぬ。なお長滝寺山内の清僧坊としては阿名院、明堯坊、真如坊、中之坊等があった。

### 三

禅宗が白山美濃馬場では八幡町以北に一寺もないというのは宗義が異なり、東氏の滅亡とともに禅宗寺院がなくなったように有力な帰依者のいなかったことが原因しているかもしれない。それに対して浄土真宗の白川照蓮寺系と安養寺系の二教線が石徹白の上在所を除いて、かくも進出しているのは「蓮如の吉崎進出を直接的契機」としているのは当然であるが、西林坊が「本願寺蓮如ノ法弟ナリ」、

道善坊が「実如ノ法説ニ感ジ」た間接的というか、その背景の要因を考えなければならない。

それにはまず修験道と浄土真宗との関係を述べなければならない。周知のように浄土真宗開祖親鸞聖人は「恵信尼書簡」に

殿のひへの山にだうそうつとめておはしましける

とあるように比叡山の常行堂の僧であった。つまり「常行堂の不断念仏に結番して勤める」(五来重 1975) 僧であった。『白山宮荘嚴講中記録』にいう堂僧もこれと同じで、その前身は白山上人(西因)が定めた「十二口之夏藤」であった。この堂僧は比叡山では十二禅衆ともいうが(『平家物語』)、夏藤は夏衆のこととおもわれる。夏衆は『源平盛衰記』「山門堂塔の事」に

抑も堂衆と申すは、本学匠召仕ひける童部の法師に成りたるや、若しは中間法師などにて有りけるが、金剛寿院の座主覚尋僧正御治山の時より、三塔(東塔、西塔、横川)に結番して、夏衆と号して仏に花奉りし輩也、近来行人とて、山門の威に募り、切物寄物責めはたり、出拳人に借しちらして、徳付、公名付などして(割注小林)

とある。平安時代末期頃は学生に対する下位の堂衆が『平家物語』「学生堂衆合戦事」(長門本)に

学生をも物ともせず、大湯屋にも申の時をば堂衆とこそ定られたりけるに、午の刻よりおいて学生の後にゐて、ゆびをさして笑ひければ、かくやはあるべきとて、学者是を咎めければ、堂衆申けるは、われらなからん山は山にてもあるまじ、学生とて、ともすれば聞もしらぬ論議といふことはなんぞ、あなおかし

とあるように、学問を専らにしている学生を陰で指差し、「われらなからん山は山にてもあるまじ」と比叡山をささえているのは一体誰だといわんばかりの力を有し、白河法皇をして『平家物語』「願立」に

賀茂河の水、双六の賽、山法師、是ぞわが心にかなわぬもの

といわしめている。このことはしかし、「聞もしらぬ論議」をしている仏教の日本化(日本固有信仰と仏教が結びついた)と考えなければならず、当時未分化の状態であった聖階級の分化が初まったと考えなければならない。すなわち堂衆階級から、覚尋僧正治山(承保四年から永保元年の五年間)頃に夏衆が生まれ、山伏である行人がでて、「徳付、公名付」とあるように某大徳とか某公等と行人が呼びあうようになった。勸進帳で有名な弁慶はまさしく山伏姿で、『義経記』「判官北国落の事」に

弁慶は西塔に候ひしかば一乗菩提の事はあらあら存じ仕りて候

とあるように西塔の堂衆であったからこそ、修験道の山である一乗菩提(葛城山、金峯山)を「あらあら」知っていたのである。

堂僧の初めが白山のように夏衆であったとすると、夏衆の修していた念仏を不断に修するようになったのが常行堂の堂僧であったといえ、さらにそれを純化、専修し往生の念仏へとしたのが浄土宗、浄土真宗であったとも考えられよう。「山伏の勤には懺法阿弥陀経」(『義経記』)とあるし、『石徹白村神仏分離書類』(『明治維新神仏分離史料』巻下所収)に白山参詣道者は

滅罪生善のため、謝罪之志を専らとして、登山有之、念仏を唱へ

たとある。これを山念仏といい、修験道の念仏は「滅罪」「謝罪」のための念仏であったが、長滝寺が比叡山東塔の常行堂の所勤になっていたことは(「延暦寺政所下文」長滝寺所蔵文書)、すこぶる注目される。白山をはじめとする地獄を表出した修験道の山は特に古くから参詣道者を引付けたが、これは日本人固有の黄泉国、根国と結びついた地獄に対する庶民の考え方が表わされているとおもう。『御文』に

ただ念仏ダニモ申セバタスカリ候トバカリウケタマ

わった人々は蓮如上人の

シカジカトソノ信心ノスガタラモエタルヒトコレナシ

という心配をよそに吉崎御坊へ集まったのはなにも往生のためばかりではなく、その根底には滅罪があったからに他ならないであろう。<sup>1267</sup>

次に蓮如上人の時代においてすら「信心ノスガタヲモエタルヒトコレナシ」という様子だったから、親鸞聖人の時代はというと五来重先生は『高野聖』の中で「すくなくとも親鸞の出自と学識と信仰に傾倒して、彼を頭目とあおいだ念仏集団は半僧半俗の俗聖の群である」といっておられるように、美濃郡上郡へ来た照蓮寺開祖嘉念坊善俊もその一人であった。善俊について『善俊光正録』でみてみよう。この書は長滝寺の静賢法印の手になるといわれ、諸国を遊行回国する善俊像を描いている。

これによると善俊は後鳥羽院の皇孫で幼名を太泰宮といい、承久の乱にさいし伊豆へ流され、伊豆三島神社の社司神祇伯部兼堯に預けられ養育される。そして貞永元年(1232)十九歳の時、箱根で親鸞聖人、下間蓮位房、高田顕智坊、性信房に出会い

去れば疾く御弟子になし下さるべしと、自ら御髪を拂ひ給へば、蓮位、顕智の両僧介錯し参らせ、御剃刀に緑の髪を剃り落し、花の袂を引かへて、濃き墨染の御衣を召しければ、聖人感涙をおさへて、悦び給ふの二字を取て、嘉念坊と号し、御一字を賜はりて善俊とぞ呼び給ひける。

とある。そして都で父の隆成親王、兄の俊高皇子とともに親鸞聖人に帰依し、善性、慶念坊善澄と法名をもらい、この二人は後に越後国高田の後鳥羽院浄光寺(浄興寺、現浄興寺派本山)を開いたという。善俊は

仁治元年(1240)二月より建長三年辛亥(1251)迄前後十二ヶ年諸国の御修行ありて、その間

高野に昔の御所縁ましましければ、暫く御足を止めらる

と善俊の出自を暴露しているとおもえるが、その後建長三年(1251)から同五年までの三カ年白鳥に逗留し(『岷江記』では弘長<sup>1262</sup>二年からとある)、その後白川へ移り道場を聞き、明応三年(1494)に寺号を許され照蓮寺と称した。善俊はこのように遊行回国的聖で、十九歳まで止住していた三島神社はこのような聖の集まっていた所ではなかったかとおもう。一遍上人はこの三島神社と深い関係があり(金井清光1975)、弘安五年(1282)にたちよっている。『一遍聖絵』に

伊豆三嶋につき給ける(日)ひ、日中より日没まで紫雲たちたり、おりふし時衆七八人一度に往生をとぐ、社官等これを(忌)いみたまてまつることなくして、結縁申侍りけれども、いさゝかのたゞりもなかりけり

とあり、社官は時衆の死を忌むどころか、かえって一遍に結縁さえしているのである。嘉念坊善俊の養親もこの社官の一人であったし、この三島社はこのような聖の集団がいたからこそ、一遍に社官が結縁したのではなかろうか。金井清光先生は『一遍と時衆教団』で「三島詣」(『宴曲集』所収)は時衆かまたは時衆と深い関係の人の作になるといっておられるのは注目される。つまり三島神社に集まっていた聖の中で嘉念坊善俊をはじめとする人々は初期の浄土真宗教団に属し、一遍上人に結縁した人々は時衆教団に属したとおもわれる。初期の浄土真宗教団に属した嘉念坊善俊が白山修験道の中に入って来て、『善俊光正録』の著者という長滝寺の静賢法印は

南岳天台の玄風、三観仏乗の理に達し、楞嚴横川の余流を湛へて、深く円融の義明らかなりける

が、嘉念坊と断金の友となりて、時々飯島に尋ね来られ御法談を聴聞して、他力本願の教を信じた。このような素地があったからこそ蓮如上人の吉崎進出を契機として白山修験が門徒になったとおもわれるのである。しかも照蓮寺十世の明心は修験的であった。また西大寺の覚乘法師というような遊行回国的聖も白山修験道の中に入っているのである。嘉念坊善俊と妙見信仰をもった東氏と関連づけるのは今のところできないが、貞永元年という年に嘉念坊善俊と東胤行が新鸞聖人に帰依しているのは注意され、照蓮寺末であった乗性寺に、東氏の一族である遠藤家の菩提寺という関係からかもしれ

ぬが『親鸞聖人御寿影由来記』と「廻国九箇条掟書」を蔵していることも留意しなければならないとおもうが、この点は後考を待ちたい。

最後に重要とおもわれる点に、禅宗の進出に限界があったことに関して注目される要因として、親鸞聖人同様に石徹白、長滝の山伏は妻帯が主で、これは山伏の未分化状態の堂衆が半僧半俗であったことがあげられよう。親鸞聖人は『尊号真像銘文』広本に

貧愛瞋憎のくも、<sup>(雲)</sup>きりに信心はおほはるれども往生にさわりあるべからず

といている。これを一方からみれば半僧半俗の宗教者の理論化ともいえないことはないが、このことはしかし「本願寺蓮如ノ法弟トナリ」、「実如ノ法説=感じ」た点でもあろう。禅宗が妻帯しなかったのと根本的に異なっている点である。門徒が念仏集会の時に飲酒、肉食をしていたのも真宗教団の僧侶が半僧半俗であったからに他ならない(『御文』)。

さて禅宗についてであるが、このうち曹洞宗は道元禅師の正法に反し一方で庶民化する。その庶民化は総持寺開山の瑩山紹瑾禅師からだといわれている(五来重1977)。『説経正本集』所収の『越前国永平寺開山記』は道元禅師が継母に苛められるという典型的な説経であるが、これに禅師が入唐する時に老人の船頭が

いかに元道、我は是、<sup>(加賀)</sup>加の国、<sup>(権現)</sup>白山のごんげん也、<sup>(禅法)</sup>御身ぜんほうをきはめつゝ、かならず我国へきたれよ、守りの神と成へしと、ひかりをはなしうせ給ふ

とあることや、白山権現が助筆したという『一夜碧巖』の話、永平寺内にある白山水と合せ考えると注目され、曹洞宗寺院の鎮守神として白山が祀られているのも地理的關係以上のつながりがあったものと考えなければならないが、この点も後考を待ちたい。

## 結 び

白山は周知のように奈良・平安時代には中央に知られ、早くから道俗の禅定、参詣がなされた修験道の山であった。天曆五年撰出という『後撰和歌集』に読人知らずとして「白山へまうでける道中よりたよりの人につけて遣はしける」と題する歌があることでもわかるように、地獄を表出した修験道の山は早くから参詣道者を引きつけた。初期の白山修験道は二つの中宮が中心であった。中宮というのは修験道の発生地をいうが、白山加賀馬場の筥笠中宮と白山越前馬場、白山美濃馬場共通の石徹白中居社である。この中宮を中心に初期の白山修験道は発展するが、その時代はというと鎌倉時代初期から中期にかけてであった。南北朝時代頃になると白山修験道の中心は中宮から本宮に移り、その勢力が全国に進出していったのである。本宮は下白山というように里宮にあたり、白山禅定道の登り口に当たっている。ところがその勢力も室町時代末期の政治的宗教的動乱にまきこまれ、退転してしまう。この室町時代末期の戦国時代こそ、鎌倉仏教の進出期であった。

鎌倉仏教のうち禅宗は八幡町以北では進出はあったものの定着しなかったのは、有力な帰依者のいなかったことがその一つの要因であろうが、白山修験道と浄土真宗の關係程の關係がなかったと考えられる。ただ曹洞宗は『越前国永平寺開山記』や『一夜碧巖』の話、永平寺内の白山水、曹洞宗寺院の鎮守神として白山を祀っていることは地理的關係以上のつながりがあったのではないかと推定される。

それに対して浄土真宗がかくも進出し定着でき、白山修験自身が門徒になったか。蓮如上人の吉崎進出があったればこそであることはいうまでもないが、その根底を考えると、第一に浄土真宗と白山修験が出自を同じくしていたことがあげられる。親鸞聖人は立宗以前は比叡山の堂僧であって、この堂僧は学生に対する堂衆階級で、この堂衆のなかから山伏が分化したのである。地獄を表出した白山

修験にとって、滅罪の念仏を往生の念仏へと転化させることはさほど困難なことではなかったろう。第二に初期の浄土真宗教団には照蓮寺開祖の嘉念坊善俊のような遊行回国的聖がおり、白山修験道の中に入って来たことがあげられる。ここで東氏と何らかの関係があったたのではないかと推定されるし、照蓮寺十世の明心が泰澄大師の再来と称されたことは照蓮寺の教線を考える上で重要である。第三には堂衆階級は半僧半俗であり、持泉坊、西林坊、道善坊、専祐坊をはじめとする石徹白、長滝は親鸞聖人同様妻帯山伏の村であった。このことは禅宗の進出、定着に限界があったことと関係あるようにおもわれる。

- 注1 この百日精進は永正五年（1508）に記された『白山禅頂私記』（『白山比咩神社文獻集』所収）では「三日七日の精進」でよいとある。この「三日七日」はおそらく「三七カ日」、つまり二十一日間のことであろう。時代が下るにつれて白山詣精進も短縮されていった。
- 注2 白山講は毎月十八日に執行され、管見の限り、中尊寺白山宮の他には白山越前馬場平泉寺、白山美濃馬場長滝寺、洲原白山社（美濃市、白山美濃馬場下山七社の岩本）で行なわれている。長滝寺では元和元年（1618）頃から年二回（3月18日と6月11日）となり、泰澄講（3月18日は泰澄大師の亡日、6月11日は生日）と改称された。
- 注3 寛政二年（1790）書写の『<sup>（和）</sup>記劬（州）熊野本縁杉原熊野大権現縁起』で真名本と仮名本の二本ある。仮名本は版本となっているので相当流布しているとおもわれる。
- 注4 越前一向一揆は『朝倉始末期』によれば永正三年（1506）頃からといい、別山にあった美濃室を石徹白に譲渡したのが翌年である（室幢坊所蔵文書『長滝寺真鏡正編』）。
- 注5 菩提寺であった木蛇寺は再建されなかったが、東氏の氏神であった妙見社（現明建社）はカキ踊の「妙見神社」歌詞に「ここにまします神様は東家幾代の守護神で、今は吾等の氏神よ」（『郡上の民謡』）とあるように当地の氏神となり現存している。このことは庶民の宗教に対する考え方を端的にしめているようにおもふ。禅宗が有力な式土等を帰依者にするによって進出し、江戸時代まで止住が存続すると檀家制度により庶民間に定着するが、そうでない場合は白山修験道の中心地では定着しにくかったと考えねばならない。
- 注6 当社の縁起は大きく分けて二種類ある。一本は天曆年中開闢縁起で、一本は本文で述べたように白山の支配が及んだところであるから、その影響によって成立した養老二年開闢縁起である。後者は『粥川山虚空蔵菩薩縁起』で最も古いものは享保十五年（1730）書写本である。前者は『高賀山星宮粥川寺由来記』で最も古いものは元禄六年（1693）の書写本である。
- 注7 『御文』四にはまた「坊主へ細々音信モ申、又物ヲマイラセ候ヲ、信心ノ人ト仰ラレ候」とあるように、信心を誤って解釈している坊主がいたことは、庶民の側からみれば贖罪に他ならない。滅罪のために物をもって贖うということが蓮如上人の意に反して存在していたことをしめており、このことは念仏が滅罪のためであって、往生の念仏ではなかったといえるのではないかとおもふ。

## 文 献

- 千葉重隆（1971）『中部山村社会の真宗』第二章白山麓石徹白の宗教 吉川弘文館
- 笠原一男・井上鋭夫（1972）『蓮如一向一揆——真宗と民衆——』岩波書店
- 金井清光（1975）『一遍と時衆教団』一遍の生涯と宗教 角川書店
- 小林一葵（1975）「白山禅定道と白山権現堂室」（『びぞん通信』38号）
- 五来重（1975）『増補高野聖』二、聖というもの 角川書店
- 五来重（1977）『仏教文学』（『鑑賞日本古典文学』第20巻）角川書店
- 白鳥町教育委員会（1977）『白鳥町史』通史編下巻第七章宗教 白鳥町
- 高瀬重雄編（1977）『白山・立山と北陸修験道』（『山岳宗教史研究叢書』10）第一篇白山信仰の成立と展開、名著出版
- 鳥越村史編纂委員会（1972）『鳥越村史』第三章古代・中世 鳥越村役場
- 早島有毅（1974）「白山信仰圏での本願寺教団の展開——照蓮寺教団形成をめぐって——」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』13集）

## Summary

Gujo County in the land of Mino is one of the three bamba (the place from which the ascent to a sacred mountain is made) in Mt. Haku. Because Kamakura Buddhism was introduced there, it is an excellent place for knowing the shift from Mt. Haku Shugendo to Buddhism. To the north of Hachiman town (Gujo County), only the Jōdo Shin sect took root, while to the south, besides the Jōdo Shin sect and the Sōto and Rinzai Zen sects, also the Jōdo sect and the Nichiren sect have each one temple. In the present paper, attention is given to the reason why the Zen sects were not able to take root in spite of attempts to do so in the north, and further, more generally, to the shift from Shugendo to Kamakura Buddhism in that region.

Mt. Haku had already been known as a center for Shugendo practices since the Nara and Heian periods. It was, however, during the early and middle Kamakura period that Mt. Haku Shugendo started flourishing, with a climax during the Nambokucho period when its influence extended over the whole country. This came to an end at the time of the political and religious upheavals of the late Muromachi era. It was in that period of the “warring countries” that Kamakura Buddhism was introduced in the area under consideration.

The Jodo Shin sect is said to have been introduced by Rennyō in 1471, when Shugendo practitioners themselves became believers. Several examples are given in the present report of *bettōbō*, connected with Mt. Haku Shugendo, which were converted into Jōdo Shin sect temples.

Although the Zen sects entered the region to the north of Hachiman town for a while, they were not able to take root. To the south of the town, however, we find several examples of *bettōbō* which, during the declining years of Shugendo, were not any longer inhabited and became consequently converted into temples of the Rinzaï and Sōto sects of Zen Buddhism.

One of the main reasons why the Zen sects did not extend in the northern area seems to have been the lack of influential and powerful converts. On the other hand, in the case of the Jōdo Shin sect there seem to have been more direct relations with Shugendo. Also the activities of Rennyō himself may have played an important role in the conversion movement. Among the relations between the Jōdo Shin sect and Shugendo a first point to be mentioned is that both are quite similar as their origins are concerned. For example, Shinran and the yamabushi came from a common social background, and also similarities on the doctrinal plane made the conversion rather easy. A second factor is that there were many itinerant monks (*yugyokaikoku-feki hijiri*) in the Jōdo Shin sect who became involved with Shugendo. A last factor may have been the fact that, like Shinran himself, the Jōdo Shin sect priests and the Shugendo priests were both allowed to marry, while the Zen monks had to lead a celibate life.